



幻の文芸雑誌の完全複製 全冊揃い、今出現する

大正期文壇の成立期とかみあう五年間(大正六年(一〇年)をカバー)する重要な文芸雑誌でありながら、完全なかたちで所蔵する図書館、文学館はなく、研究者より、なかく複製出版が待たれていた。
今回の複製版では、全57冊を、広告頁にいたるまで完全複製している。



大正期文壇を代表する豪華な 執筆陣と編集者

創刊号は、扉を島崎藤村、巻頭を山田花袋がかざり、ほかに生田長江、昇曙夢、谷崎潤一郎、相馬御風、与謝野晶子、正宗白鳥、長田幹彦など、以降も一貫して大正文芸の錚々たるメンバーが執筆している。
創刊号の編集者は春陽堂に入ったばかりの細田源吉、のちには水守竜之助や新井紀一も編集にタッチしている。



(第一号第一号表紙)



大正期文壇の動向、作家の素顔を ヴィヴィッドに伝える



(第一号第三号より)



(第四号第六号表紙)

タイムリーな作家論や合評、書評の類に特色があり、当時の文壇の状況をよく伝えている。
また、作家や文壇の集まりに関するエピソードやめずらしい写真資料が豊富に掲載されて資料価値が高い。
複製版では、貴重なウィジュアル情報はとくに写真挿入し、鮮明な再現にとめた。



新人発掘につとめた 「透谷賞」の設定

創刊号より、「懸賞文藝集」として島崎藤村の選による「透谷賞」の募集を掲げている。後には、浜田広介や久保菜らが入選作や、別に入選者として感想文を寄せている。誌面は、文壇を盛りたてようとする出版社の気概と、文学を志す若者の活気に満ちている。



大正ロマンの香り豊かな 竹久夢二の表紙画



(四本一平画
【坊ちゃん贈物画】)



創刊号の表紙は「異国情調と時代錯誤」と題されている。表紙画は、終刊号一冊(終刊号は中川一政)を除いてすべて竹久夢二による。ほかに岡本一平、近藤浩一、岡野栄らが本文中の挿画を描いている。
複製版では、表紙をフルカラー四色で当時の雰囲気をそのまま再現した。
一年分を二、四冊に合本し全体で15冊とする。さらに最終巻として、紅野敏郎による解説、総目次、便利な執筆者索引を付す。

「中央文学」複製にあたって

「中央文学」の大正文壇における史的な位置づけにわたくしが強い関心を持つようになったのは、一九六〇年代後半になってからのことである。第二次「早稲田文学」と「読光新聞」文芸欄と博文館の「文章世界」、新潮社の「新潮」と「文章倶楽部」、「白樺」と「エゴ」、「生命の川」などその衛星誌群とあわせて、春陽堂の「新小説」と「中央文学」、というようなつながりを一望しなければ、大正文壇、大正文壇のつづきなき実態究明を行うことが出来ないことを意識しはじめた。

ところが他誌は比較的実物収集も容易であったのに、「中央文学」のみは難航した。志賀直哉の「三つの処女作」といわれているうちのひとつ「或る朝」の探索にしても、じつはそう簡単にいかなかった。実物は徐々に集まってきたが、五年間ばかり続いた全冊となるとコトは難渋。表紙が最後の二冊を除いてすべて竹久夢二ということも興味をそそられたが、島崎藤村・山田花袋(作品合評も含めて)・近松秋江・正宗白鳥などや、芥川龍之介(「尾生の信」)・里見弴・加能作次郎・小川未明らも執筆。それに「仮面」薄命物語をはじめとする大正文壇にまつわる文壇エピソード、江口渕の「菊池寛の作品」など多種多様な作家論、創作月日、書評の類、また設定された「透谷賞」入選の久保菜(当時一高生)が、のち発表した「三人の樵夫の話」、浜田広介を筆頭とする入選者の感想など、これはこれはと思う事項が満載。清見陸郎の「新進作家の印象」のなかの

志賀直哉評も従来ほとんど見忘れられていた一文であった。作家の執筆一覽目録も役に立つし、「文章追悼号」も有益。つまり大正文壇の内部の実態をかいまみられる要素になんと満ち満ちていることか。

「文章世界」「文章倶楽部」に比べると、短命ではあったが、作家の写真の類など多く掲げたその編集センス(細田源吉・水守竜之助・新井紀一・多恵文雄)は決して軽視できぬ。私とその史的意義を早稲田大学の「学術研究」に発表したのが一九七二年二月の第二十一号であったが、そのときはまだ全冊確認をしてはいなかった。それがこのたびの企画でようやく念願を果たすことが出来た。「待てば海路の日和」と、それにしても実に実に長期にわたって待ちに待ったというべきか。

(早稲田大学名誉教授)



推薦します

時代の嗜好と気分

谷沢永一

たとえば一周年記念号附録の題頭に、「文壇流行語」録が三十頁以上にわたって釈義されているのを代表として、「中央文学」各号の論説に頻出する決め手言葉は、文壇、の二文字である。現今の通用語である文芸雑誌も、明治の末から大正の初めにかけては文壇雑誌であった。昭和八年に久米正雄が、まだ文壇華かだった頃、と記した、その、昔、とは、ちょうどこの時期を指しての回顧であろう。それゆえ「中央文学」など文壇雑誌の真価は、当時の原型に拠って時代の気分を会得する必要がある。その頃に掲載された作品や評論を、後年の再録選集書で読むだけでは、直ちにピンとこない同時代の気運が文壇に作用していたと思われる。ただし大正八年一月号から始まる「最近文壇消息」は至ってお粗末、文芸ジャーナリズムはまだ幼なかつた。

(評論家)

大正文学研究に不可欠

十川信介

「中央文学」は、フランス帰りの藤村の意向が強く働いている文芸誌である。版元の春陽堂とは「若菜集」以来の縁で、ここにも一地中海の旅(「海へ」収録)などを発表しているが、より注目すべきは、昭和十二年の透谷文学賞に先立つ「透谷賞」の創設である。

透谷顕彰への藤村の熱い思いもさることながら、この賞が持つ意味は、文学者の個人名を冠した文学賞の出現、それによって「文壇」を下支えする予備軍を発掘しようとする、出版社会的発想にある。

浜田広介、久保菜らの習作が二位で入選しているが、入選者のほとんどは無名に終わった文学愛好者たちである。紙面にも彼らを啓蒙するような名作再掲、文壇回顧、新文学紹介、時評などが並び、当時の文壇状況を彷彿させる。大正文学研究に欠かすことができない稀覯雑誌の複製に期待する。

(学習院大学教授)

大正文学、一閃の光芒

宗像和重

今年(二〇〇五)、生誕百年で注目されている伊藤整が、「若い詩人の肖像」に「中央文学」のことを書いている。詩の投稿欄にしばしば当選する平沢哲夫や小林多喜二というのが、同じ小樽に住んでいることに気がついて自分も投稿してみた。すると選外佳作として名前だけが出た。「私自身を現わす三字の漢字が天下の文芸雑誌の片隅に活字になって載っている、ということを見つけた時、私は全身がガクガクと震えるような気がした」というのである。これは大正九年十二月号のことだ。当時十五歳の少年が、竹久夢二の表紙から「頁一頁繰っていったその同じ体験を、今度の複製で私たちが共有できる。「中央」という言葉も「文学」という言葉もまぶしく輝いていた大正中期の、いわば文学が「市場」に呑み込まれる直前の「夢」の光芒が、いま鮮やかに蘇る。

(早稲田大学教授)